

維新の政治過程の研究に大きな問題を提起しているといえよう。(A5判五四八頁 昭和三十六年三月刊)

資料 明治篇(上下二冊)は、山崎真一郎氏を中心に編まれ、秋田県庁・秋田図書館蔵の各種記録を、件別・日付順に集大成されたものである。上巻には戊辰の形勢、藩県政治の実施、兵備・県治行政一般、税財制、勸業(明治二十三年まで)の項目に分つて計七

一四件、下冊には以後明治末年にいたる県治行政一般・勸業・税財政及び明治初年以來の交通・通信土木・学制・社寺宗教・社会について計六五九件の資料を掲げる。その中には、整理されて統計表化されたものもあるが、大多数は原史料のまま印行されている。その整理の仕方には、問題なしとしないが、明治期の資料が、かくも多数「資料集」として印行されることは他に例をみないところで、学界に益するところ甚大なものがあり、関係者の英断に敬意を表したい。(上冊A5判一一〇頁昭和三十五年三月刊 下冊一一六三頁昭和三十六年三月刊)

文芸教学篇は、書道・漢詩(石田直太郎氏)藩政時代教学・文芸(吉成直太郎氏)短

歌・狂歌・俳句(石田玲水氏)明治以降文芸(佐藤鉄章氏)絵画(太田桃介氏)等の項目にわかつて叙述され、最後に教學編年表を附している。それぞれエキスパートの筆になるだけに、何れも津々たる興味を抱かせるというべく、しかもかかる編纂方針自体、ユニークなものとして注目すべきものがある。(A5判八〇六頁昭和三十六年三月刊 以上共に秋田県発行)

以上、既刊の分について雑駁な紹介を試みたのであるが、全巻の完結が待望される次第である。(熱田 公)

岩村 町 史

岐阜県恵那郡岩村町といえ、現在は、総人口約八千人、美濃・信濃の国境に近い山間の、強いて特色も見出されないような町である。しかしここにも、豊かな歴史の歩みがあった。このほど刊行された『岩村町史』は、岩村藩、岩村城史に造詣の得に樋田薫氏はじめ青木理平・日比牟良・鶴見善一・三宅理造氏ら郷土学会を組織して研究を進められていた人々の、五ヶ年にわたる調査・研究の成果

である。岩村町の歴史は、まず、現存する十二基の古墳の解明からはじめられる。中世では、遠山荘の所在地であり、その地頭には、関東御家人として著名な加藤景康が補任され、子孫は遠山氏を称して、土岐氏と並立する豪族として繁栄をとげる。その過程は、岩村藩各種文獻記録をはじめ伝説にいたる迄を博搜して、語られている。近世は、岩村藩二万石の城下町として経営され、大給松平氏、ついで丹羽氏、さらに大給松平氏の所領となる。代々藩主の事蹟について、文政年間、丹羽瀬清左衛門を中心とする藩政改革と、それをめぐる農民の動向が、興味ある問題を提示している。さらに「町方家並帳」はじめ城下町岩村をめぐる問題、岩村藩の地方支配の問題等、歴史家垂涎の問題を展開している。一方文化面では、峰翁祖一を開祖とする大円寺、江戸時代の宗教、岩村藩学と知新館など、岩村町の特色をとらえた記述が行なわれ、明治維新と岩村藩士族の動向について近代の発展が叙述され、さらに教育・軍事・字名一覧、方言、植物等いわば「郷土誌」が記述され、最後に郷土年表が附載されている。以上、本書は恵那郡地方史の、また岩村

藩史研究の基本をなすものである。ただ若干
望蜀の言を提するならば、岩村役場・町分庄
屋引雜書、本郷分役場等に延宝の檢地帳はじ
め各種基本文献が蔵されている。かかる資料
を十分に活用されていたならば、本書は学界
にとつてもより豊かな問題を提起したかと惜
しまれる。(A5判六〇二頁 昭和三十六年
二月 岐阜県岩村町役場刊)(熱田 公)

佐伯 富編

資治通鑑索引

中国史をたくみに整理し、しかもその要を
得た書物として、古くより中国はもろろん我
が國に於ても最も愛用されたものの一つが、
司馬光の撰する資治通鑑である。同書は本文
二九四卷からなり、司馬光が一〇六五年(治
平二)に宋の英宗の命をうけて、十九年の歳
月をすいやし完成した歴史書であり、前四〇
三年すなわち周の威烈王の二十三年から、九
五九年すなわち後周の顯徳六年に至る一三六
二年間の事蹟を編年体にとめた名著で、中
國史上その右に出るものがないほど傑作と称
され、読む者をして司馬光の気魄の前に心を
奪われる感を与えるものである。まさに本索

引の第一頁に挙げられた宮崎市定先生の新版
の序にいう「資治通鑑は單に唐以前の正史の
縮本たるのみでなく、実に正史を解説するた
めの津梁でもある」という言葉が、びつたりす
る表現である。宮崎先生は同じその序の中
で「われらの恩師桑原隨藏先生は繰返し、た
ねんに資治通鑑を読まれた。先生の尤大な蔵
書は先生の逝去後、あげて京大東洋史研究室
に寄贈されたが、先生手沢本の山名本資治通
鑑はお宅に家宝として留置きを願つてある。
それには毎頁先生が朱墨で書入れを施してい
られる」といわれ、桑原博士がいかに資治通
鑑を愛されたかを物語る語を紹介されてい
る。このことは、また桑原博士の書をみても
知られることで、同博士が大正三年につくら
れ、今なお好著にあげられる「中等東洋史教
授資料」をひもとけば、随處に資治通鑑を利
用された跡がみえ、時には「委細につきては
資治通鑑をみるべし」と特記されている。博
士はなお十八史略をも尊重されたが、おそら
く同「教授資料」の幾割かは、資治通鑑と十
八史略によつて出来たものであるといえる。

この点からいえば、資治通鑑は学者たるも
の教養の書であつた。したがつて資治通鑑
が与えた影響は、古今東西にわたつて甚だ大
なるものがあり、通鑑の名を冠した著作がそ
の後つぎつぎと撰述された。宋の劉恕の「通
鑑外紀」しかり、宋の李燾の「續資治通鑑長
編」しかり、宋の袁枢の「通鑑紀事本末」し
かり、宋の朱熹の「資治通鑑綱目」しかり、
くだつては清の畢沅の「続資治通鑑」しかり。
その他影響をうけた書をかぞえ挙げれば枚挙
にいとまもない有様である。しかし資治通鑑そ
のものの注釈としては、胡三省の注をおいて
他に比すべきものがなく、本文に劣らず名著
と称され、現今行なわれている版刻のほとん
どが、この注釈を含めたものである。我が國
でも山名本や伊勢津藩本など幾種の和刻本が
出されたが、一九五六年には中国の古籍出版
社が再びこれを排印して、すべての年号には
西曆を補入し、標点分段を加え、要処々々に
校注をも施こして、ますます利用しやすく
つてきたのである。

古き時代に於ては通鑑学という呼称も行な
われる程、重要であるとともに必要な書であ
つて、東洋学を学ぶ者にとつては当然全部を
通読することが要請された。これは今日に於
ても變りないことであろう。学問はインス